

ベルクソンはどこまでシミュレーション主義か

平井靖史 (Yasushi Hirai)

慶應義塾大学

ベルクソンと現代記憶哲学

PBJ (Project Bergson in Japan¹) ではこれまで多くの観点からベルクソン哲学と分析哲学との架橋を試みてきた。時間哲学や心の哲学に並び、記憶の哲学は現在その主軸の一つを占めている。現代の分析系記憶の哲学の第一人者であるクルケン・ミカエリアンが所長を務める「記憶の哲学センター」(CPM: Centre for Philosophy of Memory) との共催になる継続的ワークショップ Remembering: Analytics & Bergsonian Perspectives は彼我ですでに3回を数えるが(2019にグルノーブル、2022に福岡、2023にグルノーブルで開催)、さらにこれとは別個に、同センターのドニ・ペラン、原健一、平井の3名でデジャヴ論をめぐるWSをベルクソン哲学研究会と共催し、「新ベルクソン主義的見解」を提唱した²。2024年3月に台北で開催された記憶の哲学の国際会議「Eurasian Memory Meeting」にはベルクソンに関するセッション(原、平井が登壇)が設けられ、ベルクソンの記憶理論は現代分析系記憶の哲学という文脈のうちに明確な場所を持ち始めている。

全過去の非物質的残存という、見るからに形而上学的主張と裏腹に、ベルクソンの「想起」の理解は、観照的写実ではなく実践的有用を強調する草分け的立場に数えられる。本報告は、ミカエリアンの提唱するシミュレーション主義³を台風の目として活発に繰り広げられる諸議論のただなかにベルクソンを位置付け直す試みである。

シミュレーション主義記憶理論 (STM)

STMは、記憶が心的シミュレーション能力の一形態であると提案する。この理論によれば、エピソード記憶は、過去の経験を固定された記録として再生するのではなく、さまざまな情報源を用いて元の出来事をシミュレートまたは再構築するプロセスである。

本発表では、STMが伝統的な見解に挑戦する以下の三点に注目する。

- ① 保存の因果モデルに依存しない: 記憶は因果的接続や内容の類似性に依存しない。
- ② 記憶におけるイメージの構築的役割を強調する: 記憶することが保存された静的な表象を取り出すのではなく、新しい表象を生成するプロセスであるとする。
- ③ 想像と記憶の区別はプロセスモニタリングによる: 内容ではなく、メタ認知プロ

¹ 2007年創設の国際・学際的研究プロジェクト。 <http://matterandmemory.jimdo.com/>

² 以下がレポジトリからアクセス可能である。平井靖史、原健一、ドニ・ペラン「デジャヴと記憶—ベルクソンと現代記憶哲学」『人文論叢』(福岡大学人文学部)第53巻第4号、1075–1115頁、2022年3月。

³ Michaelian, K. *Mental Time Travel: Episodic Memory and Our Knowledge of the Personal Past*, The MIT Press, 2016.

セスにより記憶と他の形式のエピソード想像を区別する。

ベルクソン記憶理論 (BTM)

『物質と記憶』第一章は、伝統的な認識理論をそれが没利害的・観照的である点において批判し、文脈と有用性に根底から依存する生態学的知覚理論を展開した。人間を含む生物の知覚は、ただ見るために見るのではなく、有利な行動を導くトリガーとして位置付けられる。

BTM においても、同様のことが当てはまる。ただし、エピソード記憶へのアクセスそのものが生物進化の歴史において例外的であることから、問題は二つの相へと分岐する。一つは、現在のローカルな有用性を超える方向性を記憶なるものの獲得そのものが有している点。もう一つは、しかし、そのように拡張されたリソースの利用（具体的には想起）の局面においては、やはり有用性制約が主導的となる点。

STM との対照において、BTM は①を維持しつつ②と③では近い立場をとることを示す。②生成的側面は、BTM において顕著である。彼は有名な「記憶の逆円錐モデル」において、同一の記憶が無数の「平面」（異なる可能な組織化を示す）に入ることを述べ、なおかつ想起表象に至るまでに「並進と回転」の二重の操作・編集を経ることを強調している。つまり、単一の記憶は、無数の異なる仕方で想起されえ、それは想起時点の文脈における要求に依存するという主張である。

では、そのように生成される想起イメージは想像によるそれと何が違うのか。それを担うのが③プロセスへのメタ認知である。ベルクソンは、想像と想起は、出力されたイメージだけを見ては区別できないとし、それを取り出してきたプロセスに注目する。適切な仕方で想起プロセスが発動していることを想起者が知ることが、両者の区別を可能にする。

以上の二点について、BTM は STM と一定程度軌を一にしていると言える。しかし、①保存の因果性についてはどうか。BTM の「純粹記憶」という概念は、保存性を強く主張しているように読める。もちろん、BTM はベルクソン固有の時間理論と連関しており、用いられているのは通常の「因果説」ではない。だが、STM は保存の具体的メカニズムは問わず、それを記憶成立の必要条件としないという点を論点にしている。それゆえ、争点は BTM がいかなる保存もなしの想起を認めるかに収斂する。答えは否となる。だが、その理由は STM の想定するものとは異なる。ターゲットイベント自体の同定は BTM でも自明ではない。記憶の大規模なシステム自身が更新されるため、そして想起は想起時点のシステム自身のあり方と環境に文脈的に依存するため、新たなターゲットの切り出しや他との関連づけに絶えず開かれているからである。さらに、ターゲットではなく、想起の「構成・生成」において素材として利用される多数の要素イメージ（意味記憶やオブジェクト記憶⁴）が、それ自体多数のエピソード体験から抽出合成される点も見逃せない。それゆえ、特定の想起事例において該当する過去イベントの保存がないということは許されるが、保存一般がないという設定は許されないことになる。

⁴ Openshaw, J. (2022). Remembering objects. *Philosophers' Imprint* 22(11): 1–20.